

教育臨床心理学（前田基成） 過去問と解答例

2002年度・2004年度・2005年度 より抜粋。

問題1 次の語句を説明せよ。

(1) 愛着行動

問題2 摂食障害は歴史的にみるとどのようにして生じてきたか。いわゆる「拒食症」といわゆる「過食症」に分けて説明せよ。

問題3 抑うつに陥りやすい人の原因帰属の特徴について述べよ。

問題4 次のマユミさん（仮名）とサチコさん（仮名）の会話を読んであとの問いに答えよ。

マユミ「最近、A君とどお？うまくいってる？」

サチコ「実はね、相談しようと思っていたんだけど、もう別れようと思って」

マユミ「えっ！どうして？」

サチコ「それがね、待ち合わせの時間に私が20分遅れたり、彼が電話してきたときにたまたま留守だったりすると、『自分のことを嫌いになったんじゃないか』『ほかに好きな男ができたんじゃないか』って言い出してもう大変なの。『人身事故で電車が遅れた』『たまたま買い物で外出していて電話に出られなかった』って説明するんだけど、なかなか納得してくれなくて。それに『オレのことを本当にわかってくれるのはお前だけだ』と書いていたかと思うと、サークルでの人間関係がうまくいかないことを相談されているときに、『本当に困ったわねえ』ってため息まじりに言ったら、『なんだそのため息は！うなずきながら心の中ではオレのことバカにしてるんだろ！』って突然、キレるのよね。最近ではA君に振り回されて、疲れちゃって。それでもう別れようかなって考えてるの」

マユミ「でもさ、別れてもしつこくつきまとわれるかもよ。私さ、去年バイト先で知合ったB君から誘われて1回だけ一緒に食事したの。そのとき、彼が『自分はもし野球をやっていたら、今ごろプロになっていた』なんて言うのよ。B君は小さいときから、中学校、高校と、一度も野球部に入っていたことないのよね。そう考えたらなんヘンと思って、もう会わないようにしたの。そうしたら、しつこく電話してきたり、アパートの前で待ち伏せされて、『デートまでしておいて人のことバカにしやがって！』ってものすごく攻撃的に

なるのよ。バカにするもなにも、たった 1 回だけ一緒にご飯を食べただけなのにね。まったく」

- (1) A 君は幼少のこと親から虐待されていた可能性があるという仮説に基づいて、A 君の性格について説明せよ。

問題 5 人生の最初の段階である乳幼児はその後の性格形成に大きな影響を与えるということを、次の[]内の語句をすべて用いて説明せよ。なお、[]内の語句を用いた箇所には、~~~~線でアンダーラインを引くこと。

[内的ワーキング・モデル, 生理的早産, アタッチメント, 就巢性と離巢性, 愛着行動]

問題は以上

試験時間は90分で、問題は5問

目標としては1問あたり15分で、残りの時間で完全な答案を目指しましょう。

1問あたりの配点は決まっているので、1問だけに拘らず、全部の問題で何か書け！

とりあえず、関係ありそうな単語は思い出せる限りで入れ、分量は可能な限り多くしたほうが身のためです。とりあえず、一言だけは止めて下さい。

以下、解答例

問一 (1) 愛着行動

生理的早産である人間が、親とのアタッチメントを形成するために行う行動のことで、信号行動と、接近行動に分類される。

信号行動は、泣き、笑い、注視、発声などのことであり、

接近行動は、しがみつき、歩きなどのことである。

これらの行動により、母親の自らへの接近を促進する。

問二 拒食症は富裕層の“やせの美”の概念の形成と女性の社会進出により起こった。

過食症は“やせの美”の概念の社会への浸透による自己コントロールの弱い人のダイエット意識により起こった。

問三 抑うつになりやすい人は、成功事例を外的、不安定な要因に帰属することで、自尊感情、自己評価を上げることができず、失敗事例を内的、安定な原因に帰属させることで、自尊感情、自己評価を下げってしまう。

問四 (1) A 君は境界性人格障害である可能性が高い。この障害は幼少時に虐待を受けた子供に多くみられる。この障害は、好き嫌いが極端で「大好き」か「大嫌い」かのどちらかとなってしまふ。また、「見放されるのではないか」という不安にいつもおびえ、相手との

関係を維持しようとして周囲に不快感を与えることがある。A君の行動はまさにこれにあたる。

問五 人間を鳥類の分類である**就巢性**と**離巢性**で分類しようとする、基本的には**離巢性**の特徴を持ちながらも、自力移動ができないという**就巢性**の特徴を持つ。これは脳が発達したためと二足歩行をしたためという二つの要因によって発生した、出産を1年程度早めるという**生理的早産**による。その欠点である、生存可能性の低さを高めるために、人間の幼児は子供がもつ母親に対するイメージである**内的ワーキングモデル**を利用することで接近行動、信号行動に分類される**愛着行動**を通じて**アタッチメント**を形成する。アタッチメントの適切な形成により、幼児は心理的な安定を得られ、適切な形成がなされないと、他人への不信感、自分の能力への不信感より、「消極的な」、「劣等感を持つ」性格となるので、乳幼児期はその後の性格形成に大きな影響を与える。